「地域にないなら自分たちで作ろう！」
～直売、養鶏、そして地域活動で新しい一歩を歩み続けて～

瀬戸市　　宮下　三代子さん（宮下ファーム）
畜産（酪農・養鶏）

【平成 25 年 12 月 10 日掲載】

瀬戸市三国山高原で夫とともに酪農経営をしながら、新たに養鶏部門を立ち上げた宮下ファームの宮下三代子さんを紹介します。三代子さんは、数人の仲間とともに運営する朝市の創設や新たな特産品づくりにも積極的に取り組み、地域全体の農業振興にも尽力されています。

酪農家に嫁ぎ仲間と始めた朝市

宮下さん夫妻
左：寛美さん、右：三代子さん

三代子さんは昭和 48 年に、瀬戸市東部にある標高 701ｍの三国山高原で酪農を営む宮下ファームに嫁いできました。結婚当時は乳牛 10 頭程度の小さな牧場で、夫の寛美さんは、森林組合や土木業・建築業の仕事もしながら、少しずつ飼養頭数を増やしていました。その一方で、三代子さんは自家消費のための野菜づくりを始めましたが、収穫時期になるとたくさんの野菜が余るため、何とか販売できないかと考えるようになりました。

そこで、余った野菜を販売できる直売所を探しましたが、当時の瀬戸市にはありませんでした。三代子さんは、「ないなら、自分たちで作ろう！」と数人の仲間を誘い、直売所の場所探しから始めました。紆余曲折を経て、地元農協の駐車場の一角を借りて朝市を開設したのが平成元年春でした。朝市は、開設と同時に口コミで評判となり、５台の軽トラックいっぱいの野菜が 30 分も経たずになくなることも珍しくありませんでした。

新たに養鶏部門を開始

そんな中、朝市のお客さんから、「ここの直売所は卵がないよね。」といった言葉を耳にするようになりました。しかし、近隣には養鶏農家はなく、朝市に卵を置くことはできませんでした。ここでも三代子さんは、「ないなら、自分で作ろう！」と、養鶏を始めることを思い立ちました。当初は、「素人がそんなことやらなくてもいいのに」と感じていた寛美さんも、三代子さんのやる気の強さを見て応援しようという気持ちとなり、鶏舎の建築を自らかってでました。農業改良普及課の助言を受けながら、廃材や中古のゲージを用いた鶏舎が平成５年に完成し、200 羽から養鶏を開始しました。

三代子さんは養鶏部門の主担当として、おいしい卵を作ろうと試行錯誤を続けました。その結果、海草やカキ殻を混ぜた自家配合飼料と三国山高原の清水で育った鶏が産む卵は、朝市でも評判となり、人気商品の一つとなりました。また、その評判を聞きつけた近隣の直売所からも声がかかるようになり、販売先が自然と広がったそうです。販売先の拡大とともに飼養羽数を増やし、現在では名古屋コーチン、アローカナなどを含む約 2,500 羽を飼養しています。

今年４月より稼動している新しい鶏舎
夏でも涼しい三国山では、大掛かりな暑熱対策は不要

生涯現役でいられる喜び

これから三代子さんが目指すのは、「生涯現役で頑張っていける農業経営」だそうです。そのために、夫の寛美さんが65歳を迎えた今年、重労働が多い酪農経営を娘夫婦に移譲し、自分たちは高齢でも続けやすい養鶏で生計を立てていくことにしました。平成24年に鶏舎を新設し、あと20年働き続けられるように機械化しました。「リタイアする年になっても、やりがいを持って続けられる仕事があるのは幸せ。」と三代子さんは笑顔で語ってくれました。

また、三代子さんは地域活動への取り組みにも意欲的です。「道の駅瀬戸しなの」ではオープン前に、食堂に出すメニューや地域の農産物を使った加工品についての検討会が何度か開催されました。この検討会に、三代子さんは三国山高原の女性農業者とともに参加しました。そして、この検討会で関わった仲間とともに、平成22年夏、三国山高原農事組合女性部を立ち上げました。現在は、女性部として、高原ならではの新鮮な野菜や、漬物などの新たな特産品作りに取り組むとともに、道の駅で月１回テント市を行う中で、三国山を知ってもらい、地域を盛り上げるための活動に尽力されています。

上　：道の駅「瀬戸しなの」に設けられた宮下ファーム専用コーナー
左下：自慢の一品、名古屋コーチンの卵
右下：娘の優子さんが作る加工品

これからの女性農業者に向けて

最後に若い女性農業者に向けてアドバイスをお聞きしたところ、「子供と向き合える時間は意外と少ないので、小学校卒業までは子供と過ごす時間をたくさん作って欲しい。」と前置きをした上で、「自分の考えを実行できるのが私たちの仕事（農業）のいいところ。自分がやりたいと思うことがあれば、自信を持ってやって欲しい。必ずやって良かったと思える日が来る。」と自らの体験をもとに力強く語ってくれました。

また、「養鶏を生涯現役で続けていこうと考えたことに、実は家族経営協定がきっかけとなっている。協定書に経営移譲の年齢を書いていたので、その後の将来を前向きにとらえ、具体的に考えることができた。協定は多くの方におすすめしたい。」と家族経営協定の活用についても語られました。

‘ヤマゴボウ’を利用した漬物を
仲間とともに新たに開発

必要と思うものは自らの力で作り出し、やりたいと思うことを一つずつ実行してきた三代子さんに女性農業者の目指すべき姿を見た気がしました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2013, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.